

宰府画報



1幅 紙本墨画 掛幅装 56.4 × 91.0cm 江戸時代後期 久留米市教育委員会蔵

第23号

2024年7月
(令和6年)

行 府 市
宰 員 会
育 委 財
文 化 財 課
太 教 文

逸品探訪

筑後磐井古蹟人形原図

齋藤秋圃作

掛軸をおさめる箱に「筑後磐井古蹟人形原図」と墨書があり、6世紀初頭に北九州一帯を治め、ヤマト政権と戦った「筑紫君磐井」の故地として、つとに知られる場所を描いたものとわかります。現在の福岡県八女郡広川町の西部、右手を南として走る旧薩摩街道の一条村あたりから、南東の石人山古墳の丘陵を眺望しています。

画面右下に「焮圃」と読める印があり、絵の作者が齋藤秋圃であることを伝えますが、本作については、齋藤家資料の中に次のような重要な関連資料がのこされています(下図1〜8)。その資料とは、長崎や日田などいくつかの土地に伝わる奇譚を記した帳面で、この中に本作と同じ場所を写した図(図1〜4)、古墳に関わる武装石人および石室の図(図5〜7)、そして石人石室の言われの文章(図8)があります。



部分

文章(図8)があります。文章は藤貞幹著『好古日録』(1797刊)の内容を写したものです。絵は『好古日録』にある挿図とは異なります。よく見ると本作と画稿には石室を探索するような人物が描かれています。



齋藤家資料《諸国奇譚》※関連部分を抽出して並べ替えたもの

ていて(左上部分図、図4)、秋圃が現地に足を運んだ可能性を想像させます。秋圃は奥村玉蘭が企画した『筑前名所図会』(本紙9号で紹介)の挿絵の筆者のひとりであり、折々に筑前以外の名所を描く機会や依頼もあったものかと思われます。本紙21号で紹介した73歳作《博多太宰府図屏風》の太宰府図と、景観を見下ろす視点の高さや画面構成に共通する部分があり、筆致などから60代後半から70代頃の制作かと考えます。(井形栄子)

紹介した資料は、今秋に九州歴史資料館で開催される磐井をテーマにした特別展に出品される予定です。

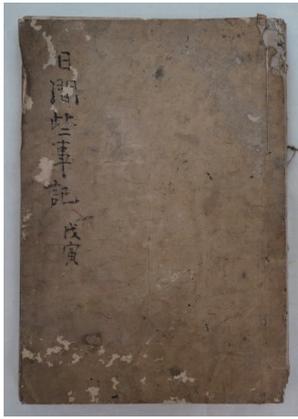
調査見聞

吉嗣拜山の清国渡航の考察 その後

「日間些事記」の翻刻

以前、本紙上で明治11年（1878）の拜山の清国渡航についてふれました（「宰府画報」第7号）。今回、原蔵者のご許可を得て、その時紹介した資料のうちの一冊である「日間些事記」（以下、些事記）について、『太宰府市公文書館紀要年報太宰府学』第18号（2024年刊）にその翻刻（付注釈）・図版を掲載させていただきました。些事記は、明治11年2月から7月までの拜山の日記（自筆稿本）で、清国渡航の全期間を含んでいるのです。

わたくしはかつて、吉嗣家資料のなかの清国渡航関連資料を用いて、拜山の清国における旅程の復元を試みたことがありますが、その時には、第7号で述べたように些事記の存在に気づいて

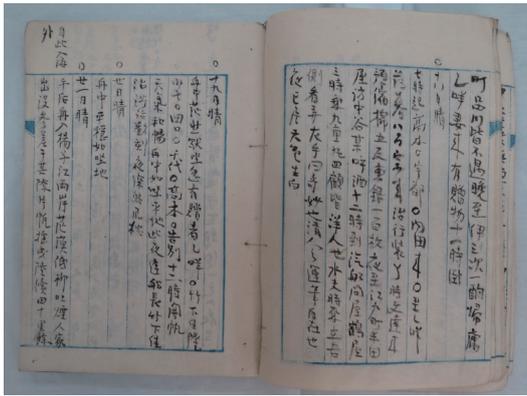


吉嗣拜山《日間些事記》表紙 吉嗣家資料

いませんでしたが、この日記が確認されたことで、旅程については確実におさえることができ、先の復元は無用のものとなりました。

長尾直茂氏の解題

今回の些事記翻刻にあたって、上智大学の長尾直茂氏に資料解題の執筆を、そして注釈の加筆修正もお願いしました。解題のなかで長尾氏は、些事記の記述において、拜山が比較的多くの筆を割いている4つの事柄を取り上げ、そこから拜山や、また清国、およ

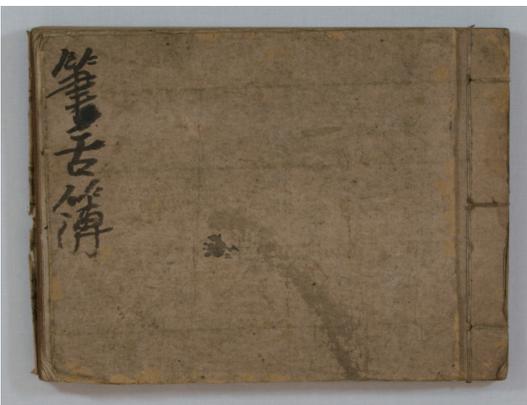


《日間些事記》三月廿一日 上海滞在時部分

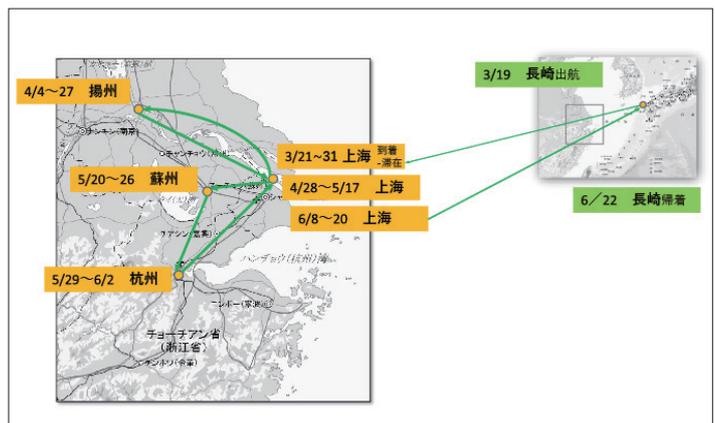
び清国の文人たちを取り巻く状況を読み解いておられます。紀要の翻刻では、紙幅の都合上、日記の本文に書き下し文を付すことは断念せざるを得ませんでした。しかし長尾氏の解題では、一部分ではありますが、書き下し文の形で紹介されていますので、ぜひ参考にしたいのだと思います。

「筆談録」との比較検討

吉嗣家資料に遺るいわゆる「筆談録」（拜山が清国渡航の際に文人たちと交わした筆談などを記録したもの、全4冊）と些事記との比較検討は、今後の重要な課題です。というのも、第7号でふれましたように、些事記にしばしば「某来たる、筆談すること数刻」「某来たる、数刻筆舌す」などの記述がみえること



吉嗣拜山《筆談録》の一冊「筆舌簿」表紙 吉嗣家資料



明治11年（1878） 拜山の清国遊歴ルート

から、両者を対照することによって、これまでよくわからなかった筆談の相手が判明する可能性があるからです。しかし、これをみきわめることも、たとえば拜山が清国で行った筆談すべてが些事記に記載されたわけではないとも考えられ、それほど単純ではないとわかってきました。ただ、両者を対照することで、些事記には名前しかみえなかった人物の素性が、「筆談録」の記述によって判明する例などもあることから、今後この比較検討の作業を進めたいと考えています。（重松敏彦）

いちまい
画稿鑑賞

齋藤家資料

笹に蛙図



紙本墨画淡彩 52.6 × 40.2cm 弘化3年 (1846)

「クワツクワツ」と田んぼからカエルの歌が聞こえてくる梅雨。この絵は旧暦五月の生物界の一コマを描いた写生図です。見開きページいっぱい斜めに伸び上がるクマザサの枝とその葉にじっと座って休息するカエル、左ページ上部にトンボとスッポンが描かれています。

その体は濃いめの緑黄色で表し、クマザサの渋い緑色は「笹の葉ウス墨書ノ上クサカケ」の墨書から墨の上に草色をかけて表したことがわかります。トンボは複眼が接しているの日本で最大のオニヤンマでしょう。広げた翅の1枚だけに脈を描きこんでいます。ひっくり返ってお腹を見せるスッポンは、茶色地に薄墨の斑点のある体、薄墨で描かれたヒレ状の手足、乾筆で描かれたごつごつした頸が特徴です。「スッポン子五月末」の墨書からスッポンの子供であることがわかります。

じっとしているカエルはともかく、動きの速いトンボや、水中で泳ぐスッポンを写生するのは難しいはずですが、トンボは捕まえて観察したのでしよう。写生を得意としたのは、円山応挙(1733~95)が創始した円山四条派という京都の画家たちでした。京都生まれの秋圃の画風形成を考える上で、写生図は大きな意味を持っていると思われまます。(小林知美 協力:佐々木公隆、佐々木浩)

メイショ
メイブツ

宗像大社辺津宮の標石

交通安全の神として信仰を集める宗像大社。平成29年(2017)に「宗像・沖ノ島と関連遺産群」の構成要素としてユネスコ世界遺産に登録されたことは記憶に新しく、宗像市田島に所在する辺津宮には1年を通して多くの参拝客があります。福岡県民ならば何度もお参りしたことがあるという方も多しはす。ですが、ここに太宰府の絵師・文人ゆかりの名物があることを御存じの方は多くはないと思います。



宮小路浩潮書「皇族下乗」



吉嗣拝山書「官幣大社宗像神社」

それは辺津宮に参拝する人が必ず目にするふたつの標石で、ひとつは大駐車場から進んで境内地に入る左手前に、堂々たる存在感を放つ立っ社標です。黒味のある石面には、肉太でやわらかな行書体で「官幣大社宗像神社」とあり、背面に回ると、この書が明治34年(1901)9月に吉嗣拝山が揮毫し、上野市兵衛という石工が作ったことが、十数名の関係者の名とともに刻まれています。宗像大社はこの年官幣大社の社格となり、それを記念して建てられたものと思われまます。

もうひとつは、本殿が建つ神域へ入る神門前にある「皇族下乗」の標石です。ここから先は何人も乗り物から下りて参拝くださいという意味です。こちらも背面に各種の情報があ、本誌22号で紹介した太宰府の書家・宮小路浩潮が、明治26年(1893)12月に揮毫し、津屋崎村(現福岡県福津市)の占部太平なる人物が寄進したとわかります。

ともに文人・書家の名士として絶頂期にあった拝山と浩潮の活躍ぶりが偲ばれます。(井形栄子)

関係者
名鑑

Vol.3

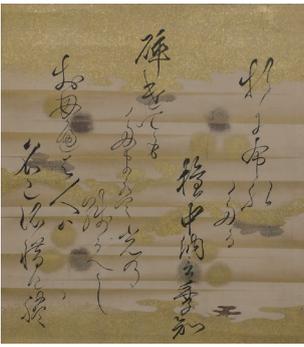
三
三
条
西
季
知

生没年 文化8〜明治13 (1811〜1880)
関係者 吉嗣梅仙、吉嗣拝山

プロフィール

幕末、尊王攘夷派の公家。文久3年(1863)8月18日の政変後、長州を経て慶応元年(1865)太宰府に下った、いわゆる五卿の一人。季知は他四卿よりも20歳前後も年長で当時50歳代半ば。同3年王政復古により帰京を許され、新政府の参与となる。明治天皇の和歌の師でもあった。享年70歳。

左の写真は季知の和歌色紙。「折に触れたる／権中納言季知／砕けてもたまは光の残るべし思へば人は名こそ惜けれ」。この歌は、江島茂逸『維新起原太宰府紀念編』(明治26年)に「幕吏小林某太宰府に來たりし時」の詞書で収められています。「幕吏小林某」は、五卿が太宰府に移った翌慶応2年(1866)3月に幕府から目付として派



《和歌貼交》部分図



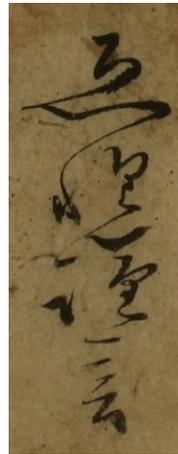
三條西季知肖像
『五卿と太宰府』より転載

《和歌貼交》
紙本墨書 掛幅装

遣された小林甚六郎でしょう。尊攘派のシンボリック的存在である五卿を太宰府に置くことに危険を感じた幕府は、彼らの大坂・江戸送りを考え、その交渉を小林に当たらせました。五卿の拒絶また薩摩藩士の妨害もあって、小林は難渋し幕府としては不首尾に終わりました。とはいえ五卿方としても樂觀でいる状況にはなく、万一の覚悟ができていたことは記録に残ります。そんな背景を考えると、この歌はよく理解できます。玉が砕けるとはすなわち「玉砕」。玉は砕けてもなお光を宿すように、我が身に何かあったとしても名を惜しみ見苦しい真似はしないという決意です。(赤塚睦男)

ひとこと
くずし字

【 恐 惶 謹 言 】



書状の末尾には書止文言とよばれる、定型の文言が使用されることがあり、江戸時代の文書にもよく見られます。今回紹介する「恐惶謹言」もそのひとつで、「つつしんで申し上げること」を意味し、相手に対する敬意を現します。大幅に簡略化されることもあり、今回は4文字ハッキリと確認できます。「恐」は上半分がひらがなの「ろ」のように見え、下半分の「心」は「一」のように横線で書かれます。「惶」と「謹」は共に左側の部首と右半分が離れています。隣の「信」という字も漢字中央が開いており、どうやらこの手紙の送り主の癖のようです。4文字目の「言」は「云」という字にも見えます。

この文書は「信廉」という人物が韋行様(齋藤秋圃)宛てたもの。前半部分分が失われているため詳細は不明ですが、画の送付について記されています。

す。秋圃が活躍した時代の太宰府天満宮別当を務めた人物である大鳥居信廉がこの書状の送り主かもしれません。秋圃は太宰府天満宮に関連した作品を複数数遺しているため、大鳥居信廉から作品の制作を依頼された可能性も考えられます。(木村純也)

この資料



〔書状〕(前欠) 15.0 × 25.6cm 齋藤家資料

編集後記

◆ 今号は古代の筑紫君から、明治時代の清国渡航と、太宰府の絵師資料の奥行と幅の広さを感じさせる内容となりました。(木)

◆ 11年目に突入した絵師調査事業。調査室を大幅に模様替えして心機一転、手つかずだった吉嗣家の工芸品類調査を開始しました。(井)